

ペシヤワール会報

No.47

ペシヤワール会
一丁目一〇一三五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二
〒810 福岡市中央区大名



- 新病院＝治療センターの建設を!!..... 中村 哲
- まずは現地語の習得から..... 松井裕光
- 必要なものが見えてきた..... 小幡順子
- サンダル改良に奮闘中..... 倉松由子
- 憤りを力に変え..... 藤田千代子
- 新病院完成をこの目で見てみたい..... 村井瀨一
- 忘れ得ない光景..... 小寺孝雄
- 半分叶えられた夢..... 沢田裕子
- 我々のオアシスを守っていききたい..... 服部亮市

フセインと父の巡礼 *表紙絵 甲斐大策

ペシヤワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシヤワール会 インターネット

ホームページ <http://www1.meshnet.or.jp/~peshawar/Home - J.html>
電子メール peshawar@mx1.meshnet.or.jp

新病院＝治療センターの建設を!!

2年以内の診療開始がリミット

家主組合から「立ち退き勧告」が三月に出されました。だが、かれらとは敢えて争わず、一定の賠償額を二年間収め、その後立ち退くことで決着をつけました。他の医療機関も一般にハンセン病患者の取り扱いが決して好意的と言えず、忍耐が要ります。時に心ない仕打ちに対し、銃身に憤懣をぶちまけてさっぱりと解決したいような衝動に駆られることもないではないのです。しかし、罪のない患者たちを思えばやむを得ず、ひたすら悲憤を押さえて臥薪嘗胆です。

JAMS (日本-アフガン医療サービス) 顧問医師
PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 院長

中村 哲

ペシャワールは断食月明けの祝日が終わりました。短い春を惜しむように、次々と美しい花々が咲き競っています。あと一カ月もすれば酷暑の到来です。もぬけの殻だった PLS (Dehrawar Leprosy Service) の病棟も患者たちが再び増え始め、たちまち満床になりました。病棟は多忙となり、しばし休戦状態にあったアフガニスタンの首都カブールでは武力衝突の再開です。

「陰謀とテロの巢窟」と見做されるペシャワールでは、外国NGOの本格的捜査が行われ、とかく噂のある団体の閉鎖が行われています。今回取り締まりの標的になっているのはアラブ系とアフガン系の怪しげな団体で、もちろん私たちは大丈夫です。もともと、大方はオフィスだけを置いて事実上ほぼ活動を停止しています。

この中で、アフガニスタンパキスタン北西辺境州の国境山岳地帯を活動地域とするペシャワール会の活動は、両者の協力が欠かせません。アフガニスタンパキスタンは現在、事実上の国交断絶状態で、薄氷を踏む思いで両国籍混合チームのまとまりを作るのに苦労をします。日本から来た人々は気づかないかも知れませんが、ペルシヤ語・ウルドゥ語・パシュトゥ語が同等に行き交い、両国の人々が目的を一つに働いている様は、奇跡的ともいえるのです。でも、地域住民と行政の間では絶大な信頼を獲得し、各国の撤退を尻目に着実に歩を進めているのは不思議といえば不思議、私たちの仕事が平和の絆の一助となっているかと思えば愉快であります。

ハンセン病対策の立て直りに集中

この一年、ハンセン病対策の立て直しに集中してきました。その背景については先に報告した通りですが、計画にかかわってきた外国団体の大幅な規模縮小、誤った「達成宣言」によって関心が薄らいだこと、政治抗争で要の医療機関が機能しないことなどです。要するに、「患者は増え続けているのに活動は下火」という中、ペシャワール会が強力な後ろ盾となるべく断固たる方針を打ち出した訳です。PLS設立はその結実でした。

とはいえ、この一年半の急激な変転は、実に多大の労力の投入を要求しました。しかし、JAMSはもちろん、多くの地元の支持あって現在のPLSが成ったのは、奇跡というよりも必然だったでしょう。この間、かつての根拠地であったミツシヨン病院の事実上の壊滅、公営らいセンターの機能停止、ドイツ勢の撤退と、劇的な変化です。PLSの出現は極めてタイミングがよく、治療の場を失いかけていた七〇〇〇名の患者たちのことを思えば、天の配剤と言わざるを得ません。

谷から谷へのフィールドワーク

アフガニスタン側からはJAMS (ジャパン・アフガン・メディカル・サービス) が、これに呼応して別に一チームを編成、他方で診療所が年間二十万名に迫る患者治療を行うかたわら、谷から谷へ困難なフィールドワークを継続しています。



PLSの中庭でくつろぐ患者さん

この十カ月に百数十カ村を訪れて診療しており、ここ数年でクナール州とヌーリスタン地方の大部分の未治療患者たちを拾い出し、投薬態勢をもよりの診療所で確立します。

一方パキスタン北辺では、PLSがマズジに診療所を開き、ワハン回廊からパミールを望む領域に迫りつつあります。このため、地元チトラールの人材育成を重視、現在六名の若者を選んで実習訓練を継続しています。今年是小規模な試みですが、いずれ本格的な訓練機関をなす予定でいます。

来月下旬から若干名をほとんど情報のないワハン回廊に入れ、馬を率いる診療部隊と六月に国境地帯で合流、ヤルクン川流域の診療調査が始まります。西部国境地帯でもフィールドワークを準備、各渓谷で次々と診療活動を実施、慣れていないPLSスタッフたちの訓練を兼ねて実力偵察を試みたいと思います。

急がれるハンセン病治療センター建設

現在JAMSには一二名、PLSには四〇名のスタッフがおり、夏を前に力を蓄えて準備を怠りなく、小生はいくぶん緊迫した気分ではありますが、九六年度は①機動的なフィールドワーク、②基地病院の質向上、③ワーカー派遣の整備を主要目標にかかげて全般にわたる再編成を断行、今後数十年の不動の礎を築きたいと考えております。日本人ワーカーも三名が新たに長期ベースで加わり、十分な現地語学習と研修の後、一定期間を二年とし、その後「更新」を続ける方式をとっています。その皮切りに検査技師の松井君が既に現地に到着、研修に入っています。不自由な体を押ししての心意気、感謝と共に健闘を祈ります。

現在呼びかけているPLS病院建設計画も、その不可欠な要です。現在のPLSが民家を改造した借家住まいの上、高級住宅地の区域内にあるので、「立ち退き要求」が出ています。均質化された現代風の生活を徒に尊ぶ層にとつては、土着のもの、見かけの悪いもの、見慣れないものに対する不安が起こり、異物のように映るのでしよう。アフガン側と密接にかかわっているとすれば、二重の弱みになります。家主組合から「立ち退き勧告」が三月に出されました。だが、かれらとは取合えず、一定の賠償額を二年間取め、その後立ち退くことで決着をつけました。他の医療機関も一般にハンセン病患者の取り扱いが決して好意的とは言えず、忍耐が要ります。時に心ない仕打ち

に対し、銃身に憤懣をぶちまけてさっぱりと解決したいような衝動に駆られることもないではないのです。しかし、罪のない患者たちを思えばやむを得ず、ひたすら悲憤を押しこめて臥薪嘗胆です。とまれ、哀しきは人の性、それゆえにこそ私たちの活動が貴重なのです。殺伐な事情を胸にPLSの病棟を見れば、春を謳う庭の花々が一層美しく、他では見られぬ患者たちの笑顔、国籍を超えて和気あいあいたる雰囲気心が和みます。このわずかな平和の空間に投ぜられた内外の人々の、無数の良心的協力を思えば感慨もひとしおです。この「オアシス」こそ守らねばならないものだと、改めて励まされるこの頃です。

みなさまの御協力を重ねてお願い申し上げます。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。計画を柱にしたアフ

ガン難民の診療に携わりと共に一九八六年JAMS（日本アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。一九九四年十二月にはらい病院PLSを設立。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

まずは現地語の習得から

PLS 臨床検査技師 松井裕光

ようやくと来たな

二月五日、ペシャワールにやって参りました。臨床検査技師として働かせてもらう為に、ペシャワール会の存在を知って決意し、三年、ようやくと来たな、という感慨があります。

以前、海外青年協力隊に応募して不採用になった事があるので、こちらでも使ってもらえるか、不安でしたが、中村先生に会い、と言って頂けて喜んでいきます。

私に期待されているのは、PLSで、細菌検査と病理検査を始める事です。PLSがらゐの専門病院であり、らい菌が人工の培地で未だ培養に成功していない細菌である以上、細菌検査や病理検査まで行う必要があるだろうかと、と最初思いましたが、医師の診断・治療技術の向上の為に、将来、医療技術者の教

育機関としての機能も持たせたいという主旨を聞いて、今は納得しています。

まずは研修期間ということで、家庭教師をつけてもらい、先輩の藤田さんや小幡さんと一緒に、毎日ウルドゥー語を習っています。その後に、中村先生から、引き続きウルドゥー語の講義があります。藤田さんは、さらにその後にパシュトゥン語も習っておられます。

私のほうはウルドゥー語の発音から習っています。日本語にない音も多く、喉の奥から出す音や、英語のRよりさらに舌を巻き上げるような音があり、言い分ける事も聞き分ける事も私には難しく感じられます。

PLSの検査室にいと、患者さんが直接やって来る事が多く、その多くはパシュトゥン語を話しているようです。また、中村先生と私は、スタッフハウス(職員宿舎)のチョキダール(門衛)たちと夕食をとっています。彼らの間ではペルシャ語が使われているようです。こうした言葉もいずれは習う事になるでしょう。

フィールドワークで見たもの

昨年十月、ペシャワールに見学に来た時、



JAMSを訪れた時の松井さん(左から3人め)

北西辺境州北部、チトラール地方のマスツジ村に連れて行ってもらいました。ペシャワールから車で四、五時間、マラカンド峠をすぎると、後は延々と続く山岳地帯。奥に行く程に高さを増す峻険な山々は実に雄大で、荒涼としていながら、人によつては、そこに神の存在をさえ感じるのではと思わせる荘厳さをもつて迫ってきます。その山々がまた、医療の普及を阻んでもいるのです。緑の乏しい苛烈な自然条件の中で、あるいは川沿いの僅か



戦乱の中にあっても子供の笑顔は明るい

な平地に、あるいは山の斜面に張り付くようにして、人々の生の営みがあります。人が人としての生を全うするのに、さほど多くのものは必要としない。そんなふうにも感じられません。

二日がかりでたどり着いたマズツジの、拠点として開設の準備を進めている、電気もガスも水道もない診療所で、私たちは一泊して引き返しましたが、中村先生たちはさらに奥に分け入って行かれ、数日を経て国境付近、ワハン回廊に迫られました。そして、初めて見る医者、中村先生の姿に涙する人に出会わ

れました。生まれてこのかた病院も医者も見なかったことのない人々。医者姿を見ただけで感激の涙を流す人々。そうした人々の為に、何程かの事が出来れば、それも悪くない。

パキスタンの山奥から成田に戻って来ると、その落差の大きさに、軽いめまいに似た感覚に襲われます。この国は実に清潔で、平和で、豊かで、自由で、少しむなし。戦乱の地、アフガンの人々があんなにも渴望する、平和が、豊かさが、自由がありながら。物質文明に毒されて、人々は絆を忘れ、声もなく、孤独に立ちつくしている。かつてサイモンとガーファンクルが歌った状況が、この日本という国にも立ち現れてきているように私にはみえます。ここパキスタンではどうでしょう。イスラムの信仰篤い人々が多く住むここでは、日本で失われつつある大事な何かが、まだ脈々と生きているのではないのでしょうか。そんな気がし、また、願ってもいるのです。

▼未使用の切手・ハガキを！▲

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。

(古切手は扱っておりません)

表紙をめぐる小さな物語 10

甲斐大策

フセインと父の巡礼

商民キズイル・バーシユ、レザイエ家の長男フセインは、一九七五年三〇歳の時カーブルを離れ、以後一度も帰国していない。高級時計のピアジェ社にサング・ラジュワルドを納めている頃は順調だった仕事も、戦いの中で原石供給が滞り、バン・シエールのエメラルドを扱うようになる。八〇年代後半からは、東京・ニューヨーク・コロンビアのボゴタと周る生活を送ってきた。

母国の話題にもフセインは、S・コネリーに似た表情で笑うだけだった。ただ一度、ホテル・オークラの一室でコニヤックを飲めながら、六本木のデイスコから連れ出したフランス人と日本人の女を両脇に、アフガニスタンを口にしたことがあった。翌朝甲府へ発つという、八〇年代半ばのある冬の夜だった。

「私だってムジャヒディンだよ。弾丸は……これ。一九〇センチ近い長身を屈め、フセインは腰のバスタオルをずり上げながらアタッシュ・ケースを開いた。女達が声をあげた。そこには、米ドルと日本円の札束と数億円分と称するエメラルドがあった。その後フセインは、旧ソ連軍撤退と同時にペシャワールのシアール派組織への援助金を打ち切った。

一九九六年四月のある日、イスラマバード空港はジェットへの特別便を持つマツカ巡礼の人々と、歓送の親族・知人達でこた返していた。

「フセインの奴、今回の送金はたった三万ドル。ハビブ！ あいつに電話しておいてくれ！ 今は東京の筈。私が怒っていたと……！」

三度目の巡礼に旅発つ厳格な父は、息子からの送金に感激も感謝せず、かせぎの苦勞にも仮借ない。ハビブは戦いから戻って後、幸運にも一家の雑用職を見出したタジキである。ハビブの家族五人は、長老に怒鳴られているような父を、人垣の外からおろろと眺めていた。

必要なものが見えてきた

PLS看護婦

小幡順子

ペシャワールに春到来

ペシャワールは、今がいちばんいい季節ではないでしょうか。冬もあつという間に終わり、PLSとスタッフハウスの庭は、いろいろな種類の花が咲いています。日本の花屋に飾られている美しい花というより、かわいい素朴な花が多く植えられていて、懐かしい気さえます。生活がシンブルになったためか、日本にいたときに比べ、小鳥とか植物に目が向く様になったみたいです。二月末から、三月初めにかけて、アプリコットとプラムの木が花を咲かせていましたが、アプリコットの花は梅の花、プラムの花は桜の花に似ており、日本の「花見」気分が味わえました。

初めての現地女性スタッフ

病院では、一月末から一カ月ラマザン(断食月)の時期を迎え、その期間中、ずいぶん

少なくなったのですが、ラマザンが終わるとすぐに、患者があつという間に増え、忙しい毎日をすごしています。トレーニング中のスタッフも仕事が始まる前三十分間らしいについて学び、午後からは医学、英語のレクチャーとスケジュールが組まれています。仕事の上でも進歩がみられ、ペースはまちまちですが、それぞれがんばっているのがよくわかります。

特に近頃のヌールベীগムは、目をみはるものがあります。彼女は、トレーニングの為に診療所を設置したチトラール地方のマスツージの村から連れて来た、現地スタッフの中で唯一の女性です。まだ十六、七才です。去年六月頃にペシャワールに来ました。来た当時は二人だったのですが、一人は三、五日で、家が恋しくなってしまう、帰ってしまう、家が恋しくなってしまう、帰ってしまう、一人で残りました。彼女は私たちといっしょにスタッフハウスの中でくらしています。来た当時、まずドバダ(頭から被っている布)を仕事用の小さいものと取りかえ、白衣を着せるのに三日かかりました。それから約三ヶ月程は詰所でじつと下を向いてすわっているか、女性患者の部屋にとじこもって、なかなか来てくれません。去年の末には「今年中様子を見て村に帰らせよう」という話もあり



患者さんを診る PLS の医療スタッフ

ました。

そうしている内にチトラールから男の子二人がスタッフに加わり、この三人も含めレクチャーもすすめられ、ヌールベীগムも同じ地方の子が来て安心したのか、レクチャーに興味がわいて来たのか、よく勉強するようになり、今では仕事もほかのスタッフよりも積極的です。「モジモジ娘」から、一気に「職業婦人」に変わりました。

ウルドゥ語習得も順調

私たち日本人ワーカーも仕事が終わった後、ウルドゥ語の先生について、本格的に語学の勉強が始まりました。中村先生がペシャワールにいらつしやる間には中村先生にも習っています。以前スタッフの間では、パシユトウ語が多く話されていたため、ウルドゥ語を耳にすることが比較的少なかったのですが、チトラーの三人が来てからは、スタッフ間でもウルドゥ語を多く使うようになったため、私のウルドゥ語習得のためにもラッキーでした（ペシャワールでは、多くの人が、パシユトウ語を話し、チトララーの人々は、チトララー語を話す為、お互いの会話ではパキスタンの国語であるウルドゥ語で話すという意味です）。

私もあつという間に一年をむかえようとしています。ふりかえってみると、あつという間に一年すぎさり、やっと少し慣れたかなと感じています。今までがむしやらにとりあえずやって来たように思え、今から自分が何を勉強しなければいけないのか、どういう立場で仕事をすすめていった方が現地スタッフの為に、患者の為によいのか、少しずつ見えて来た頃です。

サンダル改良に奮闘中

PLS理学療法士 倉松由子

昨年の十二月二十九日から今年一月八日にかけて、大塚さんという整形外科靴製作の専門家の方が、PLSの靴ワーク・ショップへ指導に来て下さいました。一年程前から私が帰国の折にはお宅へうかがって、障害者の靴に関していろいろ教えて頂いていたのですが、今回ペシャワール会関東連絡会の服部さん御夫妻に同行して、奥様と一緒に現地に来て下さったのです。

現地で手に入る材料で

まず最初にワーク・ショップで使っている道具や材料、働いている職人さんたちの様子を見て頂いて、それからオールド・バザールにあるPLS御用達の靴材料屋に足を運びました。品物の種類が日本より少ないのは仕方ないとして、現地で手に入る材料でできるだけ機能的にいいものを作れるようパキスタン人の親方と一緒にみてアドバイスを頂ければ、

と思ったのです。例えば、靴の安定性、支持性を補うためのシャンク（靴底に内蔵されるスチールの薄い板）を、特に足の変形が重度の人用に、今までより強いものを探して頂きました。また、皮革に関しては、型崩れしにくく耐久性があつてかつなるべく重くならないようにするにはどういうものを選ぶとよいか悩んでいました。材料の皮革はパキスタン製はなめしの技術がよくないので、カット・ピースといっている外国製なめし皮の端切れ（使い残しの部分）をキロ当たりいくらで買っていました。カット・ピースには様々の種類のものがありますから、何を組み合わせて買っ



患者さんと談笑する倉松さん



らいの治療用サンダル

てくるか、ヒントを頂きました。面白かったのは、接着剤や糸・金具などを売っている店に入ったとき、「日本からのお客さんと一緒に来ましたよ」と言ったら、そのお店の番頭格(?)のお兄さんが日本人イコール仏教徒と連想したのか、突然「私は仏教に興味があつて、知識もたくさんある」と言い出したのです。これまで来店しても領収書での品物のつき合せや値段の話ししかしたことがなかったの、「ええ?」ときき返したら、「実は自分はペシャワール大学で考古学の学士号を取得し、専門はガンダーラ仏教だ」との答えです。残念ながらこちらの仏教の知識が貧弱なため話はそれ以上進みませんでした。つい「でも今は靴の材料屋さんで働いているんですね」と言ってしまったら、彼曰く「食べるための

仕事は大学での勉強と別なのは仕方ないでしょう。」

見た目は地味でもはき易いものを

今、PLSでは標準靴として、靴(前足部が幅広で、甲のところがマジックテープのベロで留める。男女同じデザイン)と男性用サンダル(伝統的なパタニ・スタイル)、女性用サンダル(つっかけ型)をサイズ別に量産しています。フィールドで配ったり、病院に来た変形の少ない患者さんに渡しているのです。このうち靴と女性用サンダルに関してはまだまだ改善の余地があつて、「庶民がはいっている既成の安いプラスチック靴よりは足にいい」という現在のレベルから、「製作工程が繁雑でなく、見た目は地味でもはき易くて靴の機能をよく果している」というレベルへ近づけたいと思っています。また、標準靴の他に、足の変形やマヒの重度な人のためにオーダーメイドの靴も必要に応じて作っています。既成の木型では合わない足用に特別に専用の木型を用意するとか、足底の一部に荷重が集中してしまうような足ならその圧力を分散させる工夫等はこれまでもしていました。さらに、らいの患者さんにはしばしばみられる、足関節が不安定な場合のサポートや、下

垂足(つま先が上げられない)用の靴、足底板(履物の中にさし込む装具)の作り方を教えて頂きました。

スジがいいですね!

もう一つ、あれやこれやの合い間に時間をとって、石こうで足型をとるやり方を、ワーク・ショップの親方のムルタザと理学療法担当の看護士サダカットに対して実地指導をお願いしました。木型の修整ではカバーしにくい変形足用の靴や、足装具を作る場合は、石こうで足型を採る技術が必要です。また将来的にはカラチのレプロシー・センターでやっているように、フィールドへ行つたとき患者さんの足型をとつてくれることができれば、病院に來なくとも変形足用の靴を作つてあげられるようになるかもしれません。とはいっても、マヒがあつたり関節が変形しているような足の型をきつちりとるのはかなり習練が必要だそうで、とりあえずさわりの部分をお願いしました。先生は、「なかなかスジがいいですね」と言つて下さいました。今回は短期間に盛りだくさんのことをお聞きして、こちら側も一ぺんには消化できないでしょうが、少しずつでもこの機会を生かしていきたいと思ひます。

憤りを力に変え

PLS看護婦

藤田千代子

ペシヤワールは、バラ、スイトピー、パンジー、ブーゲンビリア等の花が咲き乱れ、とても良い香りがし、木々は次々に芽ぶき、きれいな緑にそまりつつあり、故郷の鹿児島をなつかしんでいます。お元気でしようか？

PLSの庭も花と緑で一杯になっていて、その中に患者が長々と横になっているのを見ると羨しく感じる位の日です。一年程前、らい診療機能を失ったミッシオン病院を出て、JAMSにベッドごと、八床間借りし、そのすぐ後に民家を借り移ることになって発足したのが今のPLSです。スタッフが、看護助手一人、入院患者だったアブドラ、くつ職人三人に、ドライバー一人に、日本人三人で九人しかいなかった時の事で、JAMSのドクターやアーベット(JAMSの古参スタッフ)達から離れて行くのがとても不安で、ペシヤワール会の事務局長の村上先生に電話で不安を訴えたことを覚えています。その後、清掃

人として雇用されたヌールモハマド、らい患者であり十一才位からミッシオン病院に入退院を繰り返していたフアズレワヒドがアブドラ(アフガン人の若い患者)と一緒にメディ

カルワーカーのトレーニングに加わり、そしてチトラールから三名、ヤールマスディン、

アミルディン、女性ワーカーとしてヌール

ベীগムと、合計六人の子供達が勉強を始め

ています。いづれも高校生程度の若者ですが、

学校に行つた子、行かない子、退学した子、

アフガン人、パキスタン人と様々です。それぞれ実家が遠いため、五名はスタッフハウス

に寄宿中です。スタッフハウスは、JAMS

のカーベット職人や検査技師、看護士も住んでいて多勢です。チトラールの子供達は、冬

はロワライ峠が積雪で閉鎖されるため、断食

あけのイード(祝日)も病院で実習、仕事を

してすごしました。一緒に働いているサイー

ド先生が彼らを自宅に呼んでくれたり、ペシ

ヤワールに住むヒダヤット(ベテランのら

い診療員でリーダー格)がこの子達のことを

思って職員全員での遠足を計画したり、思い

やってくれていました。以前一緒に働いていた所(ミッシオン病院)では、なぜか同僚を

いたので嬉しかったです。

得た知識を使う

ペシヤワールの他の病院のスタッフを見ると、教育を受けて何がしかのライセンスを持つている人は、知識が頭にだけ沢山入っており、その得た知識を、手や足、目で使うのではなく言うばかりで手を汚さず、ふんぞりかえているのが一般的なようでした。こういうこともあり自分達で育てて行こうと始まったPLSのスタッフ養成です。今書きながら気付いたのですが、後から加わったチトラールの男の子二人も、先の子供達に追いつく位の成長ぶりです。熱型表を前に頭をひねっていた頃や、おそろおそろセッシを持って傷の手当をしていた頃が嘘のようです。久しぶりに熱型表をチェックしながら、間違いの少なさに思わずニンマリしてしまいました。中村先生の手術の助手をずっとしておられたサイード先生も腐骨除去術や皮ふ移植など一人で行なわれるようになりました。

医学の知識を持たないで、病院で実技だけに、ただの使い走りになってしまわないようには、早くからずいぶんのんびりしたペースではありましたが解剖学とらについての講義が始まっています。断食が終り、皆の元気も



すっきり現地になじんだ藤田看護婦

戻ってきたところでピッチがあがり、最近では就業前の早朝に一科目、午後から二〜三科目、解剖学、生理学、内科学、らいについて、眼について、理学療法、英語など、曜日によって時間割を作って実施されています。

病棟のムードも良好

イード明けて患者達がどんどん入院して来て、忙しくなっているので、講義と仕事の両立が皆大丈夫だろうかと心配していましたが、昼食後の休み時間に、病院のうら庭で先生や事務員、庭師、掃除人、くつ職員、ドライバー、時にはハンフリー氏も混えて多勢で（要するにPLSのスタッフ全員）バレーボールを楽しんでいるのを見てほっとしています。（こ

のバレーボール、上手、下手は別にして一見の価値あり。PLSでのバレーボールは重要な意味がある。また、いずれはJAMSと試合をしようかという話もある。）

さて、イード明けにすぐ満床になった病棟では、再び室内に収容不可になった男性患者さん用に、ペランダの三方にスタレがおろされて急ごしらえのわか病室となり、ベッドが準備されました。昼夜の気温差が激しく、昨日は最高気温三十一度で最低が十二度でした。らいの患者さん達にまじって皮フ病や骨折、足底潰瘍で入院している子供達が数人いて、スピングレイ（白ひげのおじいさんのこと）の患者の所へ行って真剣に宗教の話聞いていたかと思うと、傷の手当の時、泣き出したりしてなかなかにぎやかです。そう言えば最近患者同志のケンカが減って来ている。また、ドクター中村は、日本へひきあげたとか、他の国へ行ったとか、どこからかうわさが流れたが、ここにいるとわかってやっとたどり着いたと嬉しそうに話す患者の一家。公営病院のらい病棟に入院しており、足底潰瘍がなかなか良くならないため、PLSへ送られて来る人、中には、火傷で入院し、中村先生とサイード先生が皮フ移植をされれば全快のカーブルから来た貴婦人もいて、いろいろ

ろな人たちがまぜこぜでおもしろいことも多々あります。

ナフラット・ハエ!

一年がすぎ患者達にも自然と、PLSの存在が知れ渡りつつある今日、また新たにことが起きました。PLSは、高級な住宅街にある借家です。この地区の人々から、ここから出て行ってほしいという申し出があったそうです。ハンフリー氏に思わず「ナフラット・ハエ！（偏見だ！）」と大声で言っていました。が、今の、このPLSの大事な時期に誰がそういうことの交渉に大切な時間をさけるでしょうか。また、患者達はもちろんのこと、アフガン人やパキスタン人スタッフにとっても、ここは、（うまく説明できませんが）何か大切な場所なのです。この話を聞いた時の怒りと悲しみは、ずっと胸に残るでしょう。その昔、日本では同じ日本人によるこういう同じ事がくりかえされていたのでしょうか。ハンフリー氏いわく。「PLSのすぐ前にある大学病院は殆どが腸チフス、赤痢、結核、マラリア等の重症の感染症ではないか」と。この憤りを力に変え最善を尽くしたいと思えます。

新病院完成をこの目で見てみたい

ペシャワールを訪問して

ペシャワール会副会長
名古屋サウスライオンズクラブ
村井 滯一

困難のなかにも

PLS——あまり馴染みの少ない名前ですが、昨年末十二月に慌ただしく発足を見たPLS・ペシャワール基地病院の実情を知ることが今回の現地入りした目的の一つです。お話によれば州政府の強い要請と中村先生の十ヶ年以上のペシャワールにおける医療奉仕活動の信頼と信用により、らい病専門の診療所開設が円滑に進められて、今スタッフ三十余名の体制でらい根絶計画全体の役割を担う唯一の治療センターとなっているそうです。

PLSの内容の充実にともない、困難のなかにも次代の育成に取組み、仮設診療所でありながら入院患者四十余名を受入れ、不自由のなかにもかかわらず本番に備えるため準備をして居られる姿をみて参りました。

蔭の力

そのようなさしこまれた今の状況を見て政府側より本格的な病院建設のため用地の無償提供の話が持ちあがりました。ただしらい専門病院であること、社会福祉に役立てて使用することが条件と

していただきました。

現地の行政側の全面的な協力により早い速度で進行の様子を見ることができました。今、現地は北西辺境州全域にわたる治療センターとしての地盤を固めている段階で、チトラル、マストジからワハン回廊を経た渓谷にいたるらい多発地帯まで、保険医療活動を手始めに、政府の協力により活動を展開しています。

しかし、短期間のうちにこれだけのことをなしとげる行動力は驚嘆する思いです。このように大きく展開実施出来るのもハンフリーさんの蔭の力の大きさと、長年つちかかった信用が一番大きく影響をあたえたのだと思います。中村先生より紹介を受けて初めてハンフリーさんの人柄に接することが出来ましたが、教養ある知識人、いくなれば紳士です。PLSの今日あるのはこの人なくては出来なかつたでしょう。先生の激賞することがよくわかりますし、ハンフリーさんの人柄によって病院スタッフが集まって来るといことも理解が出来ます。PLS設立からこれからの病院の運営にいたるまで、手腕を発揮して成功に導き、中村先生の診療を煩わしていた交渉ことも全部ハンフ



PLSのスタッフにあいさつする村井さん (左から2人め)

リーさんが敏速に処理して下さるでしょう。また、そのことがどれ程先生の精神的負担を軽くすることが出来るでしょう。

JAMSはドクター・シャワリが指導的役割を、またPLSはハンフリーさんが外交渉外を担当していますが、お互いの持役割がかならずプラスとなつて成功をかちとる事が出来るでしょう。心強い限りです。この人脈を大切にして病院建設完成の夢が実現されるのを見たいものです。

忘れ得ない光景

ペシャワール会会員
名古屋サウスライオンズクラブ

小寺孝雄

三度目のペシャワール

昨年十月にJAMSとPLSを訪問した二週間の楽しかった夜を思い出してペンを取っております。その節はペシャワール会の福元さん沢田さん、共同通信の舟越さん、ポランティアでJAMSに直接参加の為の下見にと同行された松井さんの皆さんには大変お世話になりました。名古屋からはペシャワール会副会長の村井さんとお孫さん、名古屋サウスライオンズクラブのレプロシー委員会メンバーたる私の三人が参加しましたが、現地に着いてからも中村先生やドクター・シャワリやPLS副院長のハンフリーさん始め皆さんにもずい分とお世話になり皆さんの活動の足を引っ張ったことと思ひ、紙面を借りて御礼を申し上げると共にお詫びを申し上げます。本当にありがとうございます。

私達は一九八五年と八八年の訪問以来八年

ぶり三度目の訪問ですが、まずホテルが前回と同じホテルを手配して頂いてあったので、はるばる来たと言うより懐しいと言った思いで気分がリラックス出来たのがその後の行動に緊張感無く過せたのだと思います。空港まで夜なのに迎えに来て頂き久しぶりに温顔に接したことも懐しい思い出です。

活動の充実を実感

JAMSの住まいや診療態勢はずい分と充実していると実感しました。PLSは初めての訪問でしたが副院長のハンフリー氏に目撃に掛かって会話の中で中村先生とドクター・シャワリ、そしてハンフリー氏のお三方の結びつきまでのプロセスは知りませんが、これこそ神の配慮の賜だと思ひました。私利私慾とは無縁の三人が組み合されたのでしよう。

私達の第一の目的であるアフガニスタンの奥地にドラエヌール診療所を訪れた時のことも忘れることは出来ません。診療所の建物には名古屋サウスライオンズクラブの協力に依って出来たものであると言う看板ががっちり掲げてあり、壁の厚さも八〇センチもあろうかと思われる石造りの建物は戦乱で荒れ果てた中に竜宮城の御殿のようでライオンズクラブの浄財が此所に活かされていることを確



診療を待つ患者さんたち

認しました。診療所周辺の写真撮影にJAMSのスタッフの一人が同行してくれましたが、住民はすこぶる好意的でスタッフとも親しげに接して写真も自由に撮らせてくれるのですが、十五、六軒の、土で固めたような商店街にも鉄砲を持った人が六、七人もいるのは理解出来ないものがありました。

しかし、此所への往復の途中でも所々で中村先生やドクター・シャワリが住民と抱き合つての挨拶を受ける状況を見ていたから戦車がかためたゲリラの基地でも大きな河を境に兩岸でのチェックでも決して鉄砲が恐いと思ふことはありませんでした。焼けただけたまま

まのバスが走っているジャララバードの町で
 ドクター・シャワリがJAMSのスタッフの
 父親の家を訪ねて息子が元気にしていると廻
 り道をしてまで報告していた時の父親の笑顔
 も忘れ得ぬ光景です。

ハンフリー副院長にハヤッタバード地区の
 PLSの病院建設予定地に案内して貰いまし
 た。環境は申し分無しですし、建設の主旨が、
 宗教も国家も政治も一切垣根を設けず求めら
 れれば受け入れて「らい」診療のノウハウを
 教授するという崇高な方針には、心から敬服
 と同時に帰国後はライオンズクラブのアクテ
 イビティがほんの片隅を照らす小さな灯に過
 ぎなくても、十余年に及ぶこの歴史を継続す
 るように尽力しようと思つたものです。

今回の訪問で気になったことは、中村先生
 もドクター・シャワリも余りにも忙し過ぎる
 ことです。身辺の雑用くらいは任せることの
 出来る助手が是非とも必要だとつくづく思い
 ました。現地では健康上に影響するのではと
 心配しました。

JAMSで奉仕している看護婦さん達にも
 お世話になりました。物事に動じぬ度胸の良
 さには感動しました。健康に心を配って御自
 愛下さい。松井さんの活躍にも期待しており
 ます。

半分叶えられた夢

ペシャワール会事務局 沢田裕子

アフガニスタンの空気はそれはきれいでぶ
 どうやハルブーザ(すいか)の味は最高。水
 は病気で死にかけていた旅人が飲んで元気に
 なつたという逸話があるほど。六年前JAMS

Sと一緒に働いた頃、雑談になつてはいつも
 そう聞かされていました。今回の二週間の旅
 で、その六年越しの夢がやっと半分叶えられ
 ました。半分と言うのは、まだアフガン全土
 に完全な平和が訪れていないからです。カイ
 バル峠を越えたジャララバードまでの道の両
 側にも見渡すかぎりの国内難民のテントや土
 の家が荒野に息をのむような規模で広がって
 いましたし、家屋が全壊した集落の脇も通り
 過ぎました。一方、私達が訪ねたダラエヌー
 ルの渓谷では、実りの秋が始まつており、の

どかな刈り入れの風景が車窓いっばいに広が
 って、かつてここで戦争が行われていたなど
 信じられないほどでした。村人は古くからの
 習慣か、JAMSの車と擦れ違つたたびに手を
 上げ挨拶をしています。私達のクリニック

が村の人達に受け入れられているのだな、と
 その度に嬉しくなりました。

国境での待ち時間を含め、ペシャワールを
 出発して六、七時間ほど経つた頃にダラエ
 ヌールのクリニックに到着しました。あいにく
 金曜日で診療の様子は見られなかったの
 ですが、清潔でこじんまりとした感じの良いク
 リニックでした。庭に植えた花が風景に暖か
 さを添えていて、皆の心の余裕が感じられる
 のかのようでした。

クリニックに一泊しての帰り道、私の目
 に並木道にしか見えなかつた道の両脇を指し
 て、シャワリ先生がここはもとと一面オ
 リーブ林だったのだが、ムジャヒディンの潜
 伏を防ぐため政府軍が全て伐採してしまつた
 のだ、と教えてくれました。先生に言われ
 さらによく見ると、丸裸にされた大地に三十
 センチほどの若いオリーブの木が育ち始めて
 いました。それがここの平和の背丈そのもの
 のようで、この若木が再び青々と茂る日を思
 わずにはいられませんでした。

中村先生の原動力に感心

念願のアフガニスタン行きを終えてホッと
 する間もなく、次はチトラルーマスツージ行
 きのもっとハードな旅が待っていました。

ペシャワールからチトラルまで車で十三時間。海拔三、二〇〇メートルのロワレイ峠越えは絶景ながら、さすがにこたえます。更にその先のマストージまでは、悪路を六時間。途中、中国の援助で舗装中の道路があつてしばらくは助かったものの、激しくバウンドする車内でゴツンゴツンと頭を打ち続け、タンコブが出来た人も。中村先生は、一体何を思つてこんな所まで、と辺地へ辺地へと向かうその原動力に感心するやら、あきれれるやら。ましてあのロワレイ峠が雪に閉ざされた時に歩いて越えたなんて……。

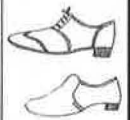
今回かけ足ながらドラエピーチ、ワマを除いた私たちの活動拠点を見て感じたことは、JAMSのシャワリ先生とPLSのハンフリーさんという車の両輪を得て、アフガニスタン人の壁を越えた協力関係が生まれて来ているということ、そして「ペシャワール会の皆さんに宜しく」という言葉を以前にも増して色んなスタッフから聞くようになり、現地と私たちとの絆が強くなっている、ということでした。

最後に、私たちの旅が無事に終わるよう、いたわり、守ってくれた中村先生、日本人ワーカーと、現地のスタッフ全員に感謝します。

我々のオアシスを守っていききたい

ペシャワール会関東連絡会

服部亮市



変わらぬペシャワール

「五年振りのペシャワールは、変わらぬ、優しさで私たちを迎えてくれた……」と、いかにも散文的に書き出したところであるが現実は、「変わらぬ、喧騒と埃、そして増えた排気ガス」が、私たち一行を待ち受けていた。

年末・年始の休みを利用して私たちは、靴・補装具の専門家である大塚さんご夫妻とともに久しぶりにペシャワールを訪れた。大塚さんは、ワーカーの倉松さんが日本に帰ったときにいつもいろいろと技術相談にのっていたにいたる、靴・補装具の職人さんで、埼玉県大宮市で開業している方である。その大塚さんが「一度現地で技術指導していただけないか」という倉松さんの願いに応えボランティアとしてペシャワールにいかれる決心をされ、私たちは当初出発までのお手伝いをするつもりでいた。しかし、「そろそろまたバキスタンにいつてみたい。新しく独立したPLSもこの眼で確かめたい」という気持ち

が強まり、それじゃあせつかくだから、というので今回ご一緒させていただくこととなったのだった。

大塚さんご夫妻は、奥様のお言葉によれば「海外旅行はおろか国内旅行にもあまり出かけない」というお二人なのであるが、早々とパスポートを取得され荷物の準備も何回か我々と打ち合わせ万全を期した。しかし初めての海外旅行にバキスタンというのは、初めてのスキーでいきなりリフトに乗せられ上級コースに連れていかれるようなもので、やはりだいたいお疲れになったようであり、その点お二人には非常に気の毒なことをしてしまつたと申し訳なく思っている。

私たちも風邪をひいたまま日本を旅立ち、体調を崩したりして藤田さんをはじめ現地のワーカー方にご迷惑をかけてしまったのであるが、しかし一方、とても有意義な旅であったことは確かである。



募集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMS と PLS では日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々を便を回すことしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢25歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。
- ② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはバシュトゥウ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。
- ④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）

詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440〔分室〕

自信をもって勧誘できる

なによりも現地の PLS のスタッフの顔がよく見えるようになったこと、そして実際にフィールドにも連れて行ってもらい診察の様子のはんの一端であるが見学できたことなどは今後の関東での普及活動において自信をもって人を勧誘できる材料となった。そして私自身は特に、JAMS のシャワリ先生、ヤコブ氏に再会でき安心感をおぼえたことはもちろん、PLS のスタッフに信頼できるリーダーが存在していることを実感し、「この人達のためにも自分をもっと活動に関わらせていきたい」と決意を新たにしたのである。

大塚さんは、「時間がなく教えたいこと

半分も伝えられなかった」と残念そうであったが、実質滞在期間九日間のうち二日間のスワート旅行以外はほとんど靴ワークシヨップの親方と二人のお弟子さん相手に、ご自身の秘伝技をおしげもなく日本語で伝授し、まさに煙銀の風格を見せつけたのであった。（倉松さんが、「大塚さん、ここにお出でになつたが百年目、もう逃がしませんよ」といった風に、大塚さんの影のようにピツタリと付き添っていたのが実に感動的であった!）

今年、私はもう一度ペシャワールにいきたいと思っている。中村先生の著書「ペシャワールにて」のあとがきにある「…これは我々みんなのオアシスである」とのお言葉通り、華やかな都市でなく、そこに住む住民や旅人の疲れを癒す清冽な水がひっそりとかつ絶え間なく湧き続け、だれもが心落ち着けることのできるオアシスを、現地の人々とともに守っていきたいと願うからである。

今回ペシャワールまで行っていただいた大塚さんご夫妻、現地でお世話になった日本人ワーカーと現地スタッフに、この場をお借りして心から御礼申し上げたいと思います。

（関東連絡会からは我が松井さん（検査技師）が二月五日にペシャワールに旅立った。ゆつくりと仕事をされることを願っています。現地事業拡大に伴います関東連絡会の使命は重くなってきたと自覚しています。定例会への参加といろいろなアイデアを是非ともお待ちしております。関東地域の方お気軽にご連絡下さるようお願いいたします。）

●事務局だより

*中村先生の報告にもありますように、PLSの新病院建設問題が、切迫してきました。恒久的なハンセン病の治療センターの必要性は、当初から痛感されていたのですが、現地をとりまく状況がさらに病院建築の緊急性を要求しています。

ハンセン病は、世界的・歴史的にも差別と偏見にさらされてきた病ですが、保健医療上は、すでに根絶寸前のようなレポートがなされつつあります(WHOもそのような見解です)。ところが、パキスタン北西辺境州やアフガンの山岳地帯では、フィールドワークによって続々と患者が発掘され、すでに七千人が登録されています。さらにその後には、数万の患者の存在が推定されます。特に肉親以外に肌を見せないイスラム女性の場合、現状では外国人の看護婦によらない限り、早期発見は非常な困難を伴います。中村医師が常々訴えるように、ハンセン病は、持続的なケアと忍耐が必要な病です。私たちが、現地政府と社会福祉法人として二五年の契約を結ん

だのも、そのような背景を見据えてのことです。

*ところが現在のPLSの建物は、二年契約の仮住まいの上、地域の住民たちの偏見にもとづく追い立てを迫られています。さらに政府から無償提供を受けた建設予定地に対しても、現地開発局から「二年以内に診療を始めないならば土地を没収する」という勧告を受けました。

死にもぐるようになって、建設資金五〇〇万円を集め、二年以内に病院を建てねばなりません。皆さまのご支援を切にお願いいたします。

●ペシャワール会ハンセン病院建設基金
郵便振替 〇一七三〇一九一三二四二一

*初代の事務局長だった、佐藤雄二氏が亡くなって五年になろうとしています。佐藤雄二追悼文集が刊行されました。購読希望の方は、事務局までお知らせください。頒価は、送料込みで、三〇〇〇円(実費)です。

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何かを根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四) 四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四) 四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一〇〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六四
電話 〇三(五六八七) 二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員は改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE (〒八一〇 福岡市中央区大名二丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二一三七二) 内におく。